

痙攣するデジャ・ヴュ

——ビデオで読む小津安二郎——
②3 『彼岸花』——里見弴との合わせ鏡で——

中 澤 千磨夫

「いろのみち」

一九五八（昭和三十三年）九月七日公開の第四十九作。小津安二郎最初のカラー作品である。日本最初のオールカラーが、木下恵介監督の『カルメン故郷に帰る』（一九五一年）であること、小津がイーストマンや富士ならぬ西ドイツのアグファを採用したことなど、日本映画史上のエポックとして広く知られている。そこに立ち入るのはここでの任ではない。

それは例えば、田中真澄『小津安二郎周遊』（二〇〇三・七、文藝春秋）の第十六章「いろのみち、いろいろ」に譲ろう。小津が日本映画監督協会会長として『カルメン故郷に帰る』に深く関わった経緯^{ゆきたて}については教えらる。五所平之助が『黄色いからす』（一九五七年）を、成瀬巳喜男が『鰯雲』（一九五八年）をと、彼ら初のカラー作品をアグファで撮ったことに触れ、「派手なイーストマンより渋いアグファを評価したのは、やはり松竹蒲田小

市民映画で形成された感覚」とも指摘していた。『黄色いからす』では設楽幸嗣の演技が印象的だったし、成瀬についても集中的に論じたいと思っているが、そんな機会が来るかなあ。成瀬が小津はふたりいらないとされ、松竹からPCLに移ったことも思い出したい。

そのほか、画家の宮田重雄が『カルメン故郷に帰る』評で好意を表しながらも、「色彩に関する点を甘くして喝采することは出来ぬ」（『東京新聞』一九五一・四・四）と断じていたことに「一読、甚だ爽快な気分になる。やはりこうした公正厳格な態度が、批評の本来のありかたでなければならぬ」と田中がいつていることに揺すぶられる。いかにも、何の権威にも拠らない在野の田中真澄の心意気を感じ入るからだ。また、『彼岸花』以降、色彩の様式を追及し続けた小津を「知識を学習する人」と観じたことにも注目すべきだ。小津安二郎は単にモダニストであるという水準を越え、日々学ぶ人であった。

あざなえる慶事と弔事

富士山のショットに続き、例によりドンゴロス背景のクレジット。「昭和三十三年度／芸術祭参加作品」、「昭和三十三年度／芸術祭」は白、「参加」が赤、「作品」が黒文字。変わってタイトル「彼岸花」。「彼岸」が白文字、「花」は赤文字である。ヒガンバナ・曼殊沙華は赤が多いが白いものもある。いわずもがなの工夫であるが、カラーであることを利用して、開巻早々、彼岸花の赤白を点描したのだ。先走っていつておけば、この作品に植物としての彼岸花は出てこない。続いて、「原作里見弴／文藝春秋所載／角川書店刊」と出る。こちらは朱、白、黒と色分けられてある。いきなり細かいが、紅白に加え黒文字を使用しているのにも意味があるう。結婚式から始まる映

画『彼岸花』はまさしく紅白。それが彼岸花に繋がると黒白の追悼ともなる。開卷ドンゴロス早々、慶事・弔事
のあざなえること暗示しているというのは読みすぎだろうか。

里見弴「鶴亀」

小津が里見弴を愛読していたことは、戦後の交友も含め周知のこと。貴田庄『小津安二郎文壇交遊録』（二〇〇
六・一〇、中公新書）は、小津日記をもとによく摘記している。小津日記には、例えば、修水河渡河作戦前の一九
三九年一月二十六日に「衛兵所で蠟燭をつけて紅茶をのんで、里見弴の鶴亀をよむ。会話のうまみにはほとほと
頭が下る」（田中眞澄編纂『全日記小津安二郎』一九九三・一二、フィルムアート社。以下同）とある。小津が里
見弴に学んだものは、端的にいつて「会話のうまみ」であった。

「鶴亀」の冒頭はこうだ。「……もしく、あ、姉さん？ お手隙てすきだったら、ちよつと来て頂けないかしら」
ゆつくりした口の利きように、却って、何事か起つたことを思わせるものがあつた。／＼「なアに？ 誰かどうかし
たの？」このほうは、あべこべに、いやに急せぎ込んで、「だアレ？ 光子でもどうかした？」／＼い、えね、ちよつ
と、おばあちゃんが転びなすつてね……」／＼「あら！ いつ？ どこで？」（ここでの引用は『初舞台・彼岸花 里
見弴作品選』二〇〇三・五、講談社文芸文庫による。以下同）。もつと引いてみたいが、まずはこの辺で。

姉妹の電話応答なのだが、会話の妙がよく表れているか。むろん現今とは違い、長幼による言葉遣いの差のゆ
かしさはいうまでもない。妹と姉のスピード差による緊張感とユーモア。「なアに？」「だアレ？」というカ
タカナを交えたりリズムの作り方も基本的なことだろう。私の場合、クエスチョンマーク、ビックリマークやリ

ダーの多用は好まない。というか、批判的だが、これも簡便なりズムを創出する工夫なのだと思ふもする。

冒頭の数行で四人もの人物が登場。一見ノンシヤランな会話から、以下この姉妹を中心とする家族模様が展開される。なかなか複雑な関係が、次第々々に明らかになっていくのが醍醐味なのだ。鶴と亀は、「おばあちゃん」と早逝した妹の名。亀は冒頭姉妹の母である。ふたりの今は、かなりかけ離れたものとなっている。会話を舌で転がせば堪能度が高まる。

喪服問題

風邪を引いた鶴が家中に蕎麦をふるまおうとするドタバタは読ませる。その風邪。いつでもフェータルだ。「肺炎ささえ起」させずにするば」は姪のお勝（冒頭の妹）の台詞。お勝はお芳（冒頭の姉）に「い、えね、冗談は冗談として、……姉さん、喪服もってるの？」という。妹は三越で誂えることにしたから、姉の分もどうかと。軍需景気で羽振りが良く山の手中流の「細君」に収まった妹と「二号さん」の姉の経済状態がさりげなく示される。

小津の読者なら、この会話にすぐさま反応するはずだ。そう『東京物語』（一九五三年）の喪服問題だ。かつて私は次のように書いた。尾道から「ハハキトク」の電報が来た場面。「志げ「ちよっと兄さん」／幸一「なんだい」／志げ「喪服どうなさる。持ってく」／幸一「うーむ。持ってた方がいいかもわからんな」／志げ「そうね。持っていくましようよ。持ってって役に立たなきゃ、こんな結構なことないんだもの」／長年学生たちに『東京物語』を観せてきたが、この喪服の話は酷いという。もちろん、志げのそれまでの態度が刷り込まれているからでもあ

るのだが、親が死ぬかもしれないという時に喪服のことを考えるのは縁起でもないというのだ。そんなことはない、と私はいう。いざという場合のことまで考えて行動するのが大人としての生活の知恵なのだ。とはいえず、学生たちの気持ちも大切だ。『東京物語』においても喪服を用意した姉姉と用意しなかった者たちの意識の差が見られるのだ。「痙攣するデジャ・ヴェ — ビデオで読む小津安二郎 — ⑨『東京物語』 — 死の影の下に —」〔北海道武蔵女子短期大学紀要〕37、二〇〇五・三、ここでの引用は中澤千磨夫『精読 小津安二郎 死の影の下に』二〇一七・六、言視舎。志げ（杉村春子）の両親（笠智衆・東山千栄子）へのふるまいの問題は、拙稿「葦の髄から『東京物語』 — 「汚い下駄」考 —」（『キネマむさし』9、二〇一二・二、中澤千磨夫『小津の汽車が走る時 続・精読 小津安二郎』二〇一九・九、言視舎に収録）に繋がる。銭湯へ行く母に「汚い下駄」を勧めるのは板の間稼ぎの予防であって、冷たい態度ではないのだ。時代背景を知らないと言み誤る。

『初舞台・彼岸花 里見弴作品選』の解説「謎の巨人・里見弴」で武藤康史は、「以前から自分の映画は里見弴の小説からあちこち無断で借用していた — とは小津自身が認めるところだった。筋立てや道具立てから会話のししまで、借用のあとは随所に見られよう。たとえば、「鶴亀」で、老人の具合が悪くなったという話のすぐあとで喪服の心配をする姪たちのやりとりなど、小津のある映画を思い出させはしないか。里見弴の文学世界はじつに小津安二郎の発想の源泉地であった」と纏める。まことにその通りで、小津論の切り口はあちらこちらに転がっている。

キャスト

さて、映画『彼岸花』。クレジットに沿ってキャストを確認しておこう。平山渉を佐分利信。平山渉は里見淳「彼岸花」(『文藝春秋』一九五八・六、『彼岸花』一九五八・八、角川書店に所収)の登場人物。清子を田中絹代。平山清子も同じ。平山節子を有馬稲子。娘・節子も同様。三上文字を久我美子。谷口正彦を佐田啓二。近藤庄太郎を高橋貞二。平山久子を桑野みゆき。三上周吉を笠智衆。佐々木初を浪花千栄子。以下煩瑣なので飛ばすが、締めは佐々木幸子の山本富士子である。谷口正彦、三上周吉・文字父子も「原作」「彼岸花」に同じ。京都の佐々木は原作では河合。河合の名は中村伸郎演ずる河合利彦にスライド。映画の河合の役割は、原作では安藤である。小さな違いはあるが、登場人物名は里見淳から借りているのを確認しておく。

東京駅発湘南電車

開巻空シヨットは東京駅(丸の内駅舎)。大時計は午後二時五十分を差している。辰野金吾・葛西萬司の設計になる東京駅は一九一四年竣工。一九四五年五月二十五日の東京空襲で大きく損傷した。戦後修理はされたが、開業当時の姿に復元したのは二〇一二年。つまり、『彼岸花』巻頭の東京駅は長い目で見れば、貴重な姿の記録ということになる。シヨット変わってホーム側から。丸ビル、皇居の森も留めている。入線している東海道電車が画面下から支える。

ホームのシヨット。「今度の12番線発 湘南電車／沼津 伊東行 15時21分」の揭示。この頃、新婚旅行のメッカといえは熱海・伊東・湯河原といったところであった。映像内の細部については、拙稿「痙攣するデジャ・ヴェ

——ビデオで読む小津安二郎——⑫小津安二郎作品地名・人名稿（カラー映画編Ⅰ）（『北海道武蔵女子短期大学紀要』41、二〇〇九・三）に負うところ多い。ふたりの駅員（今井健太郎・井上正彦）が新婚カップルの評定をしている。私が小津の猥談と呼ぶ範疇に入ろうか。新婚旅行に限らず、旅行の目的地は交通機関の発達によって変化していった。新幹線・航空機利用の一般化により、たとえば宮崎へ、ハワイへという具合だ。

東京ステーションホテルでの結婚式。謡曲「高砂」が響く。廊下の絨毯、式場の壁紙は朱色である。机上にはバラだろうか、鮮やかな赤い花。赤の配色に注意したい。平山清子が隣席の夫・涉に三上が来ていないことを確かめる。涉は、さらに隣りの堀江平之助（北龍二）や向かいの河合利彦（中村伸郎）とも三上が来ていないことを確認する。河合が通知は出したが、欠席だという。原作では、三上は招待状を忘れ、ほぼお開きの時刻に駆けつける。細かな点は随分と異なるが、原作も映画も結婚式にまつわるエピソードから、三上父娘の問題に移っていくことを覚えておきたい。

ここで平山が、新婦の父の親友と紹介され、スピーチをする。佐分利信といえ、近頃では米粒写経のポケ役・居島一平が「サブる」とか「サブリン」とかいつて物真似で暴走し、ツッコミ役・サンキュータツオが放置するという漫才が受けている。この場面の模写はレパートリーにあるだろうか。

小津の猥談

旧友たちの二次会が「若松」で開かれている。若松は、例えば小津日記一九五九年一月九日、二十一日、二月二十二日などに記された小津馴染みの店であり、名を借用している。

奥の座敷に居るのは、平山、河合、堀江の三人。堀江が昭和十七年か十八年に呉の三上を訪ね、水交社で馳走になったと話す。「そのあとが艦長だ」と。これが『秋刀魚の味』（一九六二年）平山周平（笠智衆）が駆逐艦あさかぜの艦長だったという設定に繋がることというまでもない。「その時分があいつの全盛だな」という河合の言葉があり、三上、河合、平山の年頃の娘の話題に移行。

さらには、男の子を持つ堀江が「男の方が強いと女の児が生まれるっていうし、女が強いと男だっていうね」といい、性的な会話になる。戦後では『風の中の牝鷄』（一九四八年）で、雨宮時子（田中絹代）が息子・浩（中川秀人）をおぶって退院する場面。見送るふたりの看護婦が性病を患った学生の話をする。古く私は「こういった性をめぐる軽い会話は、ライトモチーフとして小津の世界で何度も繰り返されていく」（『痙攣するデジャ・ヴェー——ビデオで読む小津安二郎——⑥『風の中の牝鷄』——反復する階段、あるいはプシケの祈り——」（『北海道武蔵女子短期大学紀要』34、二〇〇二・三）。ここでの引用は『小津安二郎・生きる哀しみ』（二〇〇三・一〇、P H P新書）による）と書いた。『麦秋』（一九五一年）の「鯛の浜焼き」や「海苔巻き」、『秋日和』（一九六〇年）の「ハマグリ」など思い出せばきりが無い。『風の中の牝鷄』、『秋刀魚の味』の小津の階段に語呂を合わせて「小津の猥談」と呼んでみたい。

赤いやかんと喪服ふたたび

平山家の茶の間。画面右下方に色鮮やかに赤いやかん。座卓上に赤いバラ黄色いバラ数輪ずつ。脚本には「卓上に披露宴の花」（井上和男編『小津安二郎全集「下」』二〇〇三・四、新書館。以下同、脚本あるいは『全集』と

記す」とある。平山の帰宅。

シヨットが変わっても赤いやかんは自己主張する。しかも微妙にその位置を変えながらだ。田中康義『小津と語る』（一九九三年）においてアキ・カウリスマキは、赤いやかんを追い求め続けると語っていた。

さて、清子がモーニングを着替える涉を手伝う。オルゴールの「埴生の宿」が流れる。ヘンリー・ローリー・ビショップ「埴生の宿」は、山中貞雄を追悼する『麦秋』冒頭に通じている。既に、三上の海軍時代には触れられたが、平山の戦争はどうだったか。それは、またのちに。

夫婦の話題は、娘の節子の縁談話に及ぶ。平山は相手の「家柄」も気に入っている。話に加わる妹の久子（桑野みゆき）は知らない人との見合いなんて嫌だという。桑野みゆきの母・桑野道子が『淑女は何を忘れたか』（一九三七年）のヒロインであるこというを俟たない。節子も帰宅し、自室へ。

清子が夫に、明日またモーニングにするのかと尋ねる。「どことかの会社の方の告別式」だと。平山は背広でいと応ずる。妻は「そうね、モーニングだつてまごつくわよ。今日おめでたで、明日おとむらいじゃ」と。慶事・弔事重畳。

また、このあたり、先に触れた里見淳「鶴亀」の姉妹の会話を思い出した。三越で姉の喪服もという妹に対する妹に、姉が「まア、どっちにしても、どうせ要るもんなんだし、それにこの頃は、どこでもお通夜が短いでしょう？ 今日亡きょうなつて、明後日あさつはもうお葬式、なんてのが多いんだから、昔みたいに、不幸があつてからじゃア間に合わないわ。……あんななか、これからますますつま交際あが広がるばかりなんだから、夏冬ともそれアもう是非もつてなきアおかしいわよ」と。

映画『彼岸花』清子の台詞と示す内容は異なるものの、このような話題や「まア」「なきア」「要るもん」「なんて」という口調が、里見弴を通して小津の血肉になっていただろうことを確認しておきたい。

京都の佐々木

場面変わって「丸ノ内」(『全集』)のオフィスビル。何階部分かは判断出来ないが、サラリーマンが窓枠から全身外に出てガラスを拭いている。踏み外そうものなら、大げが必至。現在では考えられない絵である。だが、私自身にも似たような経験がある。一九六五年、あるいは六六年頃だろう。私に通っていた札幌市立一条中学校でのこと。大掃除の際、生徒たちは木造校舎二階の窓から、ほぼ全身乗り出してガラスを拭いた。二階とはいい条、かなりの高さで落ちれば口では済まないくらいだったと思う。私もそんな窓拭きを平気でやっていた。安全とか、事故に対する感覚など、彼我の感である。

小津の廊下を女子社員(『全集』は「女給仕」。この辺りにも呼称の大きな変化が見られる)に案内された三上がやってくる。小津の廊下(露地)では、読者がT字の底から奥の頭を見る構図となる。大和商事の「常務室」(『全集』)。ドア横には林武の裸婦の絵が掛かっている(『彼岸花』を語る)。「毎日新聞」夕刊 一九五八・九・一〇)。これは佐田啓二からの借り物で、のち、この部屋を谷口正彦(佐田)が訪問するという遊びに繋がる。

昨日の欠席につき、三上は幸せな結婚式には出たくなかったという。娘の文子が男と同棲しており、銀座のルナというバーで働いていると。見に行ってくれないかと平山に頼む。

そこへ「京都の旅館の女将」(『全集』)佐々木初が見えたと「女給仕」。佐々木は小津が京都で利用していた宿。

田中眞澄編纂『全日記小津安二郎』の一九五六年三月二十日、二十一日の項にそれぞれ「佐々木泊」、同年六月六日の項に「五時 吉井邸より谷崎邸 佐々木にて会食 里見先生と達子さんと開陽亭によつて帰る」（別手帳では「谷崎——佐々木にて会食 二泊」とある。吉井は吉井勇、谷崎は谷崎潤一郎。現在、京都市東山区に佐々木旅館は存在する。かなり前、私も宿泊したが、小津が宿泊した宿であるかは不明。聞いてはみたのだが。

初は応接室に通されていた。浪花千栄子は『彼岸花』に次ぎ『小早川家の秋』（一九六一年）にも出演。小津映画では『東京物語』の杉村春子と比肩するコメディエンヌ振りを發揮している。初の上京目的は娘の幸子の縁談と人間ドックだ。

人間ドック

浪花千栄子はNHK連続テレビ小説『おちよやん』（二〇二〇年十一月三十日）のモデル。浪花は自伝『水のように』（一九六五・八、六芸書房、未見）に収められた「私をささえてくれた人々」の「溝口健二先生」中に次のように書いている。「あの大患以前、明日から人間ドックへおはいりになるという日、珍しく先生が、小津安二郎先生、吉井勇先生、笠智衆さん、その他おおぜいさまで嵐山へおいでになり、君たち、嵯峨豆腐のほんとうの食べ方はね……などと、みなさんで嵯峨豆腐を御賞味なさいましたが、そのとき、私を小津先生に御紹介くださって、／「おっちゃん（小津先生のこと） 浪花君、たのみますよ」／とおっしゃってくださいました。その小津先生も、「彼岸花」と「小早川家の秋」の二本、お世話になりましたが、溝口先生のあとを追うようにおなくなりになりました。／名匠ふたり、あの世で、純粋な映画を愛する話題に、花を咲かせていらっしやることでこ

ございました。ついでに、と申しましては失礼ですが、この小津組の現場が溝口組とはまた違う、まるでお通夜に行つたような静かさで、先生の演出には、たいへんむずかしい注文がどんどん出され、並たいていの苦心ではございませんでした。しかしほんのさ細なことまでが、ほんとうにいい勉強になり、自分へのプラスが目に見えるようでございました」(このでの引用は、浪花千栄子『水のように』二〇二〇・一一、朝日新聞出版による)。

「あの大患」というのは、溝口健二が一九五六年、白血病に罹患し逝去したことを指す。小津日記を繰れば、その前の京都市は一九五四年六月、十一月など。いずれも佐々木に行つてゐる。小津演出については、ほかの俳優・女優もよく証言していること。溝口が小津に浪花の起用を薦めていたのは記憶したい。もうひとつ。溝口が人間ドックに入つたという証言。むろん、『彼岸花』の佐々木初に通ずる。

岩塚徹「総合検診の沿革」(『日本総合検診医学会誌』20、一九九三年)によれば、わが国のいわゆる人間ドックは、国立東京第一病院(現・国立国際医療センター病院)で一九五四年に始まつた。岩塚は、一九五八年聖路加病院で始まつた一泊二日の検診が現在の形態の原型であるという。『彼岸花』の初が受診するのは聖路加病院である。溝口が人間ドックに入つたというのがヒントにはなつただろうが、新しいものの好きの小津が自作に取り入れたのもつとものことであつた。

「浅はかなトリック」

初の上京が人間ドック受診のためとして、それが「お母ちゃんの浅はかなトリック」だというのは、平山家に挨拶に来た幸子の台詞である。京都にだつて病院はあるだろうと尋ねる平山に、幸子が応えるのだ。聖路加病院

の受診が、部下の若い先生と幸子を結びつけようという策略なのだ。里見弴の原作では、病院の医師は平山や三上の「グループ」(『初舞台・彼岸花 里見弴作品選』以下同。)のひとりという設定だが、映画ではその設定は採用されていない。映画『彼岸花』において、この母のトリックがのちに幸子のトリックとなって物語を閉めることになる。

映画『彼岸花』のメインプロットは、平山節子と谷口正彦の結婚を巡る平山父娘の葛藤だろう。平山渉は娘が勝手に決めた谷口との結婚が気に入らない。そもそも、谷口は平山が勤める大和商事の常務室に、いきなり訪れ、節子との結婚を許してくれというのだ。平山のみならず、映画の読者にとっても、これは唐突の感、拭いえない。一方の原作では、谷口は、冒頭で結婚式を挙げた安藤(映画は河合)の妻・まち子の弟という設定で、平山とも知らぬ仲ではなかった。このあたり、映画脚本の小津と野田には、里見弴の『彼岸花』の人物関係が無意識に刷り込まれてしまったかも知れない。つまり、谷口をまったくの他人としてしまった説明不足というか、うっかりがあつたかも知れないのだ。

里見弴の役割

原作・脚色に里見弴と小津安二郎が名を連ねる『青春放課後』(一九六三年)を論じた際、私は、「里見弴の関与を軽くみることは出来ない」ものの「実際に運筆していたのは小津自身だと考えるのが妥当」(『痲癩するデジャ・ヴェ — ビデオで読む小津安二郎 — ②『青春放課後』 — 岡惚れ女と下駄ばき男、あるいは「日本語の妙味」 —)本誌50、二〇一八・三。ここでの引用は『小津の汽車が走る時 続・精読 小津安二郎』と書いた。

里見弴の四男にして、『早春』以降『秋刀魚の味』まで小津作品のプロデューサーを務めた山内静夫は、『青春放課後』成立の事情につき、次のように書いている。「二月中頃から打合せに入り、父が先に書きあげて小津先生の手へ渡した。三月十日から先生の手が入り、十一、十二両日徹夜、十三日午後NHKに渡した。放送日が二十一日に決まっていた。オレの原稿にあんなに朱筆あかを入られたのは初めてだ、と父も苦笑していたが、作家との共作だろうが、テレビだろうが、小津先生の姿勢は変わらなかった。一字一句自分のものにする小津流はゆるぎもしなかった」(『八十年の散歩』二〇〇七・一一、冬花社)。山内の証言に照らせば、里見弴の役割は、先の私の判断より大きいかもしれない。とはいえ、里見邸での打ち合わせで運筆していたのは、やはり小津に違いなからう。

『彼岸花』の場合、やや事情は異なるだろうか。里見の小説と小津の映画が、それぞれ別個独立の作品として読めるのは当然だ。原作としての里見「彼岸花」と映画である小津『彼岸花』は似て非なるものと済ませられないことを、私はこれから述べたい。

解説「謎の巨人・里見弴」で、武藤康史は「映画と小説とでは登場人物の名前からして異るところがあり、設定も若干違い、会話はほとんど別ものである。三者共同による原案をもとにしつつ、別々の道をたどったようだ。それでも原作里見弴というクレジットになったのは、小津安二郎の敬意あるいは謝意がこめられていることだろうか」という。はたしてそうか。里見弴の小説と小津安二郎の映画を合わせ鏡のように捉えるとどうなるだろう。

トリックが結ぶ二組

トリック再びである。映画での「トリック」は、先に触れた佐々木初の人間ドックがらみで登場した。次いで、築地の宿で佐々木幸子が平山渉に仕掛けたものが本線となる。平山は、佐々木初が気に入る縁談より、幸子が好きな人を選べと勧める。これがトリック。幸子は今のは作り話で、節子の結婚を渉が承知したことになるといふのだ。

里見弴の小説ではどうか。こちらにも、まずは、やはり人間ドックがらみ。平山家の食堂で節子が母・清子に話す。検査入院中の初が娘の幸子を見舞に呼ぶのを、幸子にと思っている若い医者（小泉）の回診時間に合わせていると。幸子は「わざとおそく行く」と報告する節子に、母は「すると、気に入らないかね?」。節子は「うん、別に好きでも嫌いでもないんですけど。だけど、あたしだって、そんな謀略トリックみたいなまねされたら、途端に反撥はんぱちしちゃうなあ」と応える。

もう少し続けよう。「それをトリックだなんて言うんなら、一体、見合結婚はどうなるの?」という母に、「ずれもひでえもんじゃアないの」と娘。「ひでえもん」だ。すかさず母は「まあ、なんて口の利ききようでしょう。……. だけど、あたしたちは、ごくあたりまえの見合結婚だったんですよ、娘は「それでもこんなふうでいいって、つて仰おつりたいんでしょう? その点、大いに認めてるけど、それは、つまり、慍おこられるかな?」。「慍おこられる」と遠慮している幸子は、続けて「これ、想像だけだね、簡単時代の簡単人種には、やっぱり簡単な方法が一番性しよ性に適あつたのね。きつとそうだと思っわ」。

このあたりの会話。里見弴だなあ。「ひでえもん」というような、娘の世代の蓮っ葉な物いいを写しつつ、すぐ

に母に敬語を遣わせる。見合い結婚について触れれば、見合い結婚と恋愛結婚の比率が逆転するのは、一九六五～六九年のことだった（『平成22年第14回出生基本動向調査（結婚と出生に関する全国調査）——第I報告書——わが国夫婦の結婚過程と出生力』国立社会保障・人口問題研究所『調査研究報告資料』29、二〇一一・三三）。高度経済成長期は日本人の生活の大激変期であった。結婚過程の相違、生死の場所の変化（家庭分婉・施設分婉や家庭での死・病院での死の逆転）などなど。親子・長幼の言葉遣いの変化も、ここに写し取られている。「簡単時代」、「簡単人種」、「簡単方法」と娘が母を評するのは、引用部分の少し前で、テレビの料理番組講師の「至極、簡単でございませうから」を承けている。幸子のはつに対する揶揄となっているのだが、これはテレビ料理番組最初期に活躍した江上トミ（一九九九～一九八〇年）を指そうか。

蒲郡へ

映画の蒲郡は旧制中学の同窓会。三上が詩吟「楠木正行如意輪堂の壁板に辞世を書するの図に題す」を吟じ、皆が「青葉茂れる桜井の」と、落合直文の唱歌「桜井の訣別」（大楠公の歌）を唱和する。一方、小説では例の仲良しグループに河合はつ・幸子を加えた集まりである。小津日記によれば、一九五六年六月三日から、志賀直哉、里見淳との三人旅に出、四日に蒲郡ホテルに泊まっている。蒲郡ホテルは、一九八七年、蒲郡プリンスホテルを経て、二〇一二年から蒲郡クラシックホテル。また、同年九月八日の項には「野田夫妻 蒲郡のクラス会に出かける」とある。

さて、里見淳「彼岸花」の蒲郡。大阪での商用を終えた平山、京都の学会で河合に滞在していた医者の木村、

それに加えて、河合はつ・幸子母子が特急「はと」の「特二」(特別二等車)で蒲郡に向かう。平山と幸子の会話。木村のところの若い医者・小泉のことを「気に入らないのやら、結婚そのものに全然興味が湧かないのやら、そこらさえはつきりさせてくれない、とのことで、だいたい情気しやうきていた」と、はつから聞かされた平山。「存外、情人いとひとでもこさえてるのではないか」と平山がはつに冗談をいったとも。

これに対する幸子の答えは意外なものだった。引用はやや長い。「——稼業しやうがいもそうとう忙しく、年がら年じゅうあ、いう母親に追い廻されながら、情人のなんのとそんな悠暢ゆうちやうな暇があるかどうか、小父様、つもつてもおわかりだろう。結婚についても同じことで、近年だいたい弱よわつて来た母親を擁かかえて、自分で言うのもおかしいが、何かにつけ、あたしがいなければ埒らちのあきかねることばかり、嫁になど行かれる身ではないというのが実状。それも、お松に屋号しよせを譲ゆづって、綺麗きれいさっぱり稼業しやうがいから手を引く、とでもいうのなら、……そうなつてからあとの話なら、また別だけれど、知つてのとおりあの娑婆しやばッ気けゆえ、自分そんなことになるう気遣きづはなく、つまりは「出来ない相談」なのだ。母親もそこへ気がついていればこそ、今までの縁談には、必ず婿養子むこやしという条件がついていた。そのくせ、おいそれと飛びついて来るような人の肚はらなら、すぐ底の底まで読みとつて了しまう母親、これまた「出来ない相談」であること、初はなからわかりきっているのに、性懲しやうちやうもなく、何遍同じ愚ぐを繰り返したことが。そんなわけゆえ、夙とちから自分は、嫁にはいかぬ、いや、いかれないもの、と心に深くきめ込んでいる、と、正面に顔と顔を見合わずにすむ座席のせいもあつてか、ずばりく言いつて退のけた」。母を残して嫁にも行けぬし、さりとて婿養子も嫌なので、はなから「出来ない相談」だというのだ。

会話の工夫

引用部分は会話を地の文にしている。里見弴の特徴のひとつなのだ。かようなスタイルについて、里見は興味深いことをいっていた。「彼岸花」三年前のことである。一九四九年発表の「雲」を収録した単行本『恋ごころ』（一九五五・九、文藝春秋新社）の「あとがき」自作解説に「まだ大抵の雑誌が仙花紙とかいふ、表はツル／＼、裏はザラザラの、粗悪な紙しか得られず、経営者はもとよりのこと、一般にも紙そのものの貴重さが骨身に滲みてゐた頃とて、小説中の会話をいち／＼鉤括弧で纏つて別行起しにすること、作家の立場としても遠慮したい気持が生じて、本文から引き続きにづる／＼と書き流した。どこまでが甲ので、どこから乙の言葉に移るのか、一目瞭然の区切の立たぬ不便はあつたけれど、一方またさういふ難局に処する工夫から、多少の得るところもなしとしなかつた。この癖いまに脱けず、作品によつては依然これを用ひてゐる。懸々として蓋さざる態、人の一生を叙する場合などには、いくぶん視覚的な効果をも伴つて、さう悪くない」と書いている。

ややこちたい論議になつてしまふが、実に興味深いではないか。まず、仙花紙。ページを繰ると細かな埃が舞つたりする、臭いも手触りも独特なモノだつた。まだ沢山私の手元にもある。印刷紙の状況に顧慮した工夫だつたというのは、同時代を生きた人には当然のことであるかもしれないが、私には、留めるに値する貴重な証言だ。思えば、昔の小説は改行が少なかつたな。紙事情から文体の変化を見ることも出来るのか。

もうひとつ。引用最後のあたり。「視覚的效果」はどうだろう。里見弴の良き読者ではない私には、なんとも判断しかねる。里見がそう自覚していたとすれば、検討に値する課題とならうか。

二組ないし四組の男女

再度の確認をすれば、映画のメインプロットは、平山節子の結婚だろう。佐々木幸子の見事なトリックにかかり、平山渉が娘の結婚を認めるのだ。それに対し、里見淳の小説では、二組ないし四組のカップルの色模様が描かれる。

簡単に整理しよう。まず、「鶴見家・安藤家御結婚式場」の安藤（映画の河合）の「美代ちゃん」。新郎の鶴見は谷口正彦の同僚。谷口は義兄の安藤に、「美代ちゃん」は女中二人分ぐらいの働きをしていたといっていた。

二組目は、その披露宴に遅参した三上の娘・文子。四年前二十歳の時。「父親との烈しい正面衝突の拳句」家出。肺病病みの吉川と同棲しており、父と親しい平山に無心する。やがて吉川は亡くなり、文子は修道院へ。映画では、文子は銀座のバー・ルナに勤めているが、同棲相手や修道院のことなどは描かれない。

三組目は、京都は河合はつの娘・幸子と人間ドックの若医者・小泉。この二人は、はつの意向を受けた平山の慫慂により、どうやら結ばれる方向だ。蒲郡からの帰途、豊橋駅の「歩廊フラットウォームの立話」。平山はいう。「君の気持、帰ってから手紙でもいってよこさないか。まだ三三度しか会ってないが、小泉君って人、僕ア好きだな。男惚おとこぼれってのか、正直いって木村より好きなくらいなんだが、君は……」と。これに続く、幸子が重要だが、今しはし。

谷口正彦の場所

そして四組目が平山節子と谷口正彦。映画での谷口の登場が、やや唐突の感あること、既に述べた。小説は違

う。まず、三上周吉が遅れてしまった結婚披露宴。谷口はかく現れる。旅行に出る新婚夫婦が階段を降りてくる。「……踊り場のあたりで、血色のいゝ、若々しい顔に似合わず綺麗に白髪になった安藤の妻女に何やら囁かれて、モーニング着用の青年が、忙がわしく取って返したが、その間にも一同は、広間を横切り、見送りのために居残った人々とも合流して、賑々しく玄関にかゝった時分に、早く早くと急きたてる様子で、背後を振り向きふりむきの青年が階段を駆けおけると、五六歩おくれて……」。この「モーニング着用」「振り向きふりむきの青年」が谷口正彦である。改行すぐに続けて、「なまごゝしてゐるんだ、安藤のやつ」と、さも歯痒げに平山が呟き、玄関のほうへ目を向けると、人々の渦に揉まれて来た新夫婦は、早くも自動車の扉ちかく、手を振りかざしているのに、思わず大膽に歩み寄りながら声をかけようとした時、あともう二三段というところでぴたりと足を停めて了った安藤は、そこからも見えよう、片手を欄干に、じつと玄関先に瞳を据えたまゝ、……奥歯の噛み締めで瘤こぶになった頬が蠢き、顛顛に怒張した青脈は今にも破裂せんばかり、……喜怒哀楽のどれひとつも片づけられない、何かぎり／＼いっぱいの表情に、恐らくたつた二人の目撃者なる三上と平山、その場に釘づけの、言葉とてなかつた。

またまた長く引いてしまったが、次々とショットを割っているかに思えないだろうか。先に『忪ごころ』の「あとかぎ」にあった里見淳の自作解説に触れたが、「視覚的な効果」とは、このような行文を指すであらうか。さらにいうなら、「そこからも見えよう」という部分。「そこ」とはどこか。玄関の自動車と階上の安藤を同時に見られる中間地点。「踊り場」に居る平山及び三上の位置にほかならない。これは、映像的視点であるとともに、映画や小説の読者の視点でもあるのだ。読者が三上・平山という父親の視点を借りて、娘を送る安藤の気持ちを共有

する仕掛けなのである。

読者のシンクロ

ここで谷口は安藤の表情を見ていないかもしれない。しかし、この後、三上・平山夫妻が安藤の家に行った場面。平山が階段での安藤の「めそ」をからかい、お開きとなり、「ひと足さきに流しの円タクを拾いに出、一同を乗せて送り帰して来た正彦は、薄暗い玄関に突ッ伏している義兄と、手中（しんぐち）を顔に、しょんぼり柱に凭れかゝっている姉とを見た。咄嗟（とつさ）には、はッと息を呑んだようなものの、すぐ馬鹿々々しい気がし、声もかけずに奥へはいった」。

多言を要すまい。玄関の義兄と柱に凭れる姉まちは、あの階段の安藤に通ずる。娘を嫁にやった義兄夫妻を通して、谷口はつい今まで一緒に居た平山夫妻の心情を慮る。まだ許しを得ていない夫妻の娘節子との恋愛の行く末を想像するからである。「すぐ馬鹿々々しい」とは思うもののだが。ここでもまた、読者が彼らの心情にシンクロするように導かれる。

平山にとって、映画と違い、小説の谷口は知らぬ男ではない。とはいえ、「だしぬけに会社に来て」「嫁にくれ」というのでは「寝耳に水」、「筋道を弁（わ）えない」、「軽挙盲動（けいげまうどう）」だというのだ。要するに、父親としてのプライドが侵されたということか。まして、知らぬ仲でもないのだから。映画の方では、平山清子が節子に、渉が谷口のことを興信所で調べているという場面がある。これは、内心許しているということだ。興信所。探偵社である。浮気調査などで生き残っているかもしれないが、今や結婚や就職の場面ではかなり後退してしまっただろう。だが、

『彼岸花』の時点に戻ってみよう。

大妻コタカ『女性教養家事全書』（一九五三・一〇、日本女子教育会、初刊は一九三六年）には、結婚相手の調査につき、「これは媒酌人なり両親なりが適当に調査してくれることではありますが、本人としても全然それ等の人任せといふことはよくありません。一生を共にすべき相手の人物に就いては充分知つて置かねばなりません。即ち、身許（現住所、原籍地、族籍）職業、勤務先、財産及収入、教育程度、健康状態、素行、思想、長所短所、趣味、教養嗜好、先方の家風、家族等」と記されている。敗戦を経た高度経済成長が日本人の感覚を大きく変えてしまったことについては、繰り返し述べてきた。大妻コタカが挙げる調査項目が戦前から戦後初期にかけての私たちの意識を縛っていたことは確認しておかねばなるまい。引用した戦後の版でも「族籍」が残っていたりする。意識は制度に遅れて付いてくる。そういえば、太宰治「きりぎりす」（一九四〇年）の夫は妻が士族の出だなんて嘘をいっていたな。

男惚れ、女惚れ

さあ、谷口と節子。映画で谷口が平山の常務室を訪れたひとつのきっかけは広島転勤。小説では札幌だ。訪れるのは平山の社長室。小説では、ふたりの仲を清子は承知しており、節子も安藤に仲介してもらうことなど模索していた。それが、「だしぬけ」となった。父の渉としても、知らぬ相手ではなし、許すつもりなのである。映画のようなトリックは必要ない。

豊橋駅プラットホームへ戻ろう。平山が小泉に男惚れしたといった直後。幸子の当意即妙な返し。「じゃア、

あたしも小父様の口真似で言わせて貰いますわ。女惚れっていうんでしょうか。あたし谷口正彦さん大好き、小父様よりよっぽど好きなくらい。節ちゃん、あの方のとおへお嫁にいったら、さぞいゝ御夫婦が出来るだろうと思うんだがなア」。この言葉に「うん、よく言ってくれた！ 有難うー」と応え、目が潤む平山。大団円は「パパ」が札幌へ行くという、谷口への節子の手紙とあいなる。「パパ」なる語も、戦後の変化を何気なく提示している。

死の影の下に

小津映画を論ずるつもりで始めたが、ずいぶんと里見淳の小説に引かれてしまっている。次は戦争だ。映画の芦ノ湖のシークウエンス。節子と久子がボートで遊ぶ湖面を、ベンチに腰掛け見やる平山夫妻。清子がいう。「時々そう思うんだけど、戦争中敵の飛行機が来ると、よくみんなで急いで防空壕へ駆け込んだわね。節子はまだ小学校へ入ったばかりだし、久子はやっと歩けるくらいで、親子四人真つ暗な中で、死ねばこのまま一緒だと思つたことあつたじゃないの」「戦争は厭だつたけど、時々あの時のことがふつと懐かしくなることあるの。あなたい」。それに夫は「ないね。おれあ、あの時が一番厭だつた。物はないし、つまらん奴が威張ってるしねえ」。清子は「でも、あたしは良かった。あんなに親子四人が、ひとつになれたことなかつたもの」。

「つまらん奴が威張ってる」という平山の厭戦気分は、『秋刀魚の味』元艦長・平山周平（笠智衆）の「敗けてよかった」に通ずる。それに対し、元一等兵層・坂本芳太郎（加東大介）は「馬鹿野郎が威張らなくなつただけでもねえ」と応じていた。空襲で防空壕というのは、太宰治の『お伽草子』（一九四五年）など連想させるが、命の

瀬戸際にも一家団欒の幸せはあったと妻は回想しているのだ。

空襲防空壕のエピソードは、小説「彼岸花」にもある。冒頭近く、三上周吉の点描だ。「海軍省作戦本部勤務の幕僚だっただけに、三上周吉には、仮令たとえどんな天祐てんゆうがおころうと、所詮しよせんどんでん返しかへしの利きかぬ敗北まけという見通しは、山本元帥の戦死よりもっと早くからついていたが、家族の者まで含めての聾つんば棧さしき敷、——軍人の所謂「地方人」に対する時、気振けぶりにもそんな心境を読まずまいとの自戒じこに、些ちさの緩みゆるもなかった。昭和改元の年に結婚して、すぐ翌年あくるとしの春、はやぐと出来た総領の子が、終戦の一年ほど前に、学徒動員で川崎の軍需工場に通うことになっても、「お国の御用だ、しっかりやんなさい」と、いつにもない厳肅な面持おももちで言い聞かせたし、防空壕内に十数人の同級生と折り重なって、僅わずかか十八年の生涯しよがいのを鎖としたと知った時でも、少なくとも人前では、涙一滴みせはしなかった。軍律に従ってそういう堅牢な仮面マスクの被かれる自分自身を省かえりれば、一言半句言えた義理でないことも承知でいながら、勤務中、上官や同僚の、全然内容なのからッぽな大言壮語を聞くうち、腹立たしさや嫌悪けんおは一足跳いっそくとびに、いきなり救いのない憂鬱ゆううつに突き落される、謂いわば心の習慣しよかんのようなものがついて了つつた」。

里見弾の軍人嫌いが、「機関将校で、何かにつけ、実科の者とは反りの合わない」三上を通じて吐露とろされている。軍人嫌い・権力嫌いが小津にも通ずることというまでもない。三上の総領息子が、敗戦直前防空壕で死んでいるのに注意したい。さらに、三上の妻は敗戦の詔勅を「聞き終るや否や喪神そうじん」し、明け方事切れたと続く。それは息子を亡くした五十日ほど後のことであった。

里見弾の長男・山内洋一は、一九四四年に戦死している。内蒙古から南方へ向かう途次だった。山内静夫は書いてる。「どう考えてもサイパン島まで輸送船が行きつけるとは思えない時期であったのに、サイパン島での

名譽の戦死という公報は、父の悲しみを怒りに変えた。父にとつて、生涯で最も暗い時期だったに違いない。隣組の集会、防火訓練……、おおよそ性に合わぬ仕事をやらされ、不機嫌な日日だった（『八十年の散歩』）と。

里見家の死者について、小津安二郎は、当然のこと里見自身や山内静夫から聞き及んでいたろう。芦ノ湖畔での夫婦の会話は、明らかにその反映である。

「あつとおどろく」 里見見弼

小津の『彼岸花』をなぞる予定が、大きく里見見弼の方へと傾いてしまった。とはいえ、残念なことに、私は里見弼の良き読者ではない。里見弼が大往生を遂げて一週間の後、篠田一士は、次のように追悼した。「半ば忘れられて……氏が最後の傑作『極楽とんぼ』を発表したのは、いまを去る二十二年まえのことだが、当時においても、里見弼は半ば忘れられた作家だった。文壇の長老のひとりとして敬愛されていたことはたしかだったとしても、里見文学を論じる批評家はほとんどなく、一般読者のなかにも、里見氏の小説に熱中するひとはきわめて少なかった。／＼里見弼は文学史的には、「白樺」派の一員に数えられていたが、このグループのトレード・マークのようになっている志賀直哉や武者小路実篤のモラリズムには縁遠く、また、「私小説」的リアリズムの幼稚さにも、なんの関わりもなかった。『桐畑』『多情仏心』『安城家の兄弟』といった長編小説群は、作者の身辺に取材しながらも、社会的、あるいは、世間への見晴らしをもち、データユも一時代の風俗の要をとらえるといったみごとなさがあった、自然主義以来の日本の小説にはめずらしい特色をもっていた。そして、これは、また、ヨーロッパの近代小説の中核をなす市民小説と、不思議に揆を一にする面があり、これは今後の究明に値する重要課題だろう。

／継承者を欠く不幸／里見氏の長兄、有島武郎の『或る女』は、ヨーロッパ小説直結の稀有な作品として、すでに高い評価を得ているが、里見弴の長編小説には回路がいくつか絡み合っていて、たとえば、尾崎紅葉が打ちたたてた硯友社文学の遺産も、そのままではないが、濾過ろかされた形で、ここに流れこんでいることも見逃せまい。／里見氏が、紅葉門下の泉鏡花に親炙しんじやし、その文学から多くのものを学びとったことは、よく知られているが、鏡花文学の幻想性には不感だったとしても、あの不拔な文章力、とくに、日本語の聴覚的な効験を存分に承うけつぎ、新生面をきりひらいた点、里見氏の右にでる作家はいないし、さらに、残念なことは、里見文学のこうした美質を継承しようとした作家が、その後、ほとんど見当たaraぬのも、日本文学の不幸である。／まあ、しちめんどくなことはよしにして、里見弴の小説を読むことだ。「かね」という短編小説一作でもいい。小説というものが、こんなに面白く、すごいもんだったかと、だれしも、あつとおどろくはずだ」〔文芸時評 上 里見弴氏の死とその文学〕『毎日新聞』（夕刊）一九八三・一・二八）。

絶賛である。本論に直接結びつきそうなポイントでは、里見弴が泉鏡花の聴覚的文体を継承しているという評言に注目だ。「あれあれ見たか、あれ見たか」〔縷紅新草〕一九三九年〕である。

赤いやかんの彼岸花

三上周吉を嫌いな軍人にしつらえた里見弴。とはいっても組織内で差別される「機関将校」ではあるが。その三上の周りに死者が蝟集しているのは皮肉なことか。長男と妻、加えて娘・文字と同棲していた吉川である。吉川の死後、三上は平山に「事が穩便おんべんにはこんでれば君の婿」と諭され、河口はつには「しーんと、みんなだんま

りで、……お通夜^{つうや}してあげまひょういな」といわれる。

なんだかんだの後、三上の妹・佐和が文子に会いに行き、兄に報告する。「あのね、往^いきには気がつかなかったんですけど、帰りの電車で、程ヶ谷へんからかしら、あっちこっち、真ッ盛りの彼岸花^{ひがんばな}で、それを見てるうちに、……すう／＼すう／＼背後^{うしろ}へ流れて行く紅^{あか}いもんが、だん／＼ぼやけだして、……あんな華美^{はで}な色で、どうしてこうも、……いゝえ、ちつとも悲しいわけじゃアないんですけど、どうしてだか、へんに涙^{なみだ}が零^{こぼ}れちゃってね……」

／＼「ふーん、彼岸花^{ひがんばな}でなア」次^{つぎ}第^{だい}に兄妹^{きょうだい}の眼前^{がんぜん}を、にじんだ紅^{あか}さがいっぱい立ち^こ罩^こめて行^いった」。

意図^{いど}してのことだろうか。『秋刀魚^{あきとうぎ}の味^{あじ}』に秋刀魚^{あきとうぎ}が登場^{ていじやう}しないのと同じように、小津の『彼岸花^{ひがんばな}』に曼殊沙華^{まんじゅさくわ}は出^いない。

しかし、しかしである。『秋刀魚^{あきとうぎ}の味^{あじ}』で鱧^{なまこ}と秋刀魚^{あきとうぎ}を対比^{たいひ}させたのとは、ちと異なるが、小津安二郎と里見淳^{さとみじゆん}の『彼岸花^{ひがんばな}』を合わせ鏡^{かがみ}にしてみたら、どうだろう。

記憶^{きこ}という行為^{けいゐ}を通してでしかないが、三上周吉^{みつしげきち}を巡^{めぐ}る死者^{しや}たちが召喚^{めいゑん}される。小津映画^{おつじんえいゐや}の読者^{よきや}は、ドンゴロスの赤白黒^{せくぱくくろ}文字^{もじ}の予兆^{よしやう}から、開卷^{かいゑん}早々^{ささ}の結婚^{けいこん}披露^{ひるい}宴^{えん}卓^{たく}上の赤^{せき}いバラ、さらに導^{みち}かれて、平山家茶^{ひらやまけいさ}の間の赤^{せき}。

そして、畳^{たたみ}の上^{うへ}を微妙^{びまう}に移動^{いどう}する赤^{せき}いやかん。アキ・カウリスマキならずとも、小津読者^{おつじんよきや}の私^{わたし}たちに、それらの赤^{せき}が目に染^ぞみる。まなかに浮かぶは、人それぞれ^{ひとそれぞれ}の無数^{むすう}の死者^{しや}たちである。

